

生活科 1・2年複式	<b>たべもの見聞録</b> ～お米を取り上げて～	松尾 浩一
---------------	------------------------------	-------

## 1. 単元について

### (1) 単元設定の理由

#### ①単元について

食という活動は、人が元気に生活していく上でなくてはならないものである。またこの活動は、食欲を満たすというたいへん魅力的なものであり、人間は昔から如何においしく食べるか、どうやって食を楽しむかということについて試行錯誤してきた。



この食を生活科の単元に取り上げた理由は、このような「おいしく食べる。」「みんなに喜んで食べてもらう。」という思いを大切にしながら、指導要領の生活科の教科目標の観点を意識しつつ、学習を展開できると考えたからである。まず、食べる体験そして、調理体験や食べ物製造工場の見学等の体験（指導要領の目標「具体的な活動や体験を通して・・・」）をたくさんできることである。次に、それらの活動をする中で、栄養士さんや調理師さん・保護者や地域の働く人々とのかかわりやふれあいが生まれるとともに、社会を見る目を養ったり、栽培活動や食に関する季節的な行事を取り入れることにより、自然とのかかわりも出てくる。（指導要領の目標「自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに・・・」）。また、食生活は、家庭生活との結びつきも強く、家庭を介して自分をふりかえること（指導要領の目標「自分自身や自分の生活について考えさせるとともに・・・」）にもなる。このように単元を捉え、「体験」「人とのかかわり」「気づき・ふりかえり」の3つをキーワードとして学習を展開していきたいと考えている。

さて、食といっても様々な食物がある。今回「実りの秋」ということでお米を取り上げることにした。栽培から収穫、そして販売や調理までの流れをトータルに学習することは、低学年の児童には無理がある。そこで、米屋さんの見学を実施したり、お米の炊き方やおにぎり作りを体験したりしながら、米にまつわるいろいろな内容にふれていければよいと考えている。また、餅米にも目を向けさせて、お餅つきをしたり、自分達で作った物をみんなに味わって楽しんでもらうようなイベント的な活動も入れ、一つ一つの具体的な活動が満足感や成就感となり、子ども個々の自信となって、次の活動への意欲という力強いバネになるように願っている。

#### ②生活科における意味と内容のひろがり

生活科における意味とは、「自立への基礎を養う」ことであり、内容は、「自立への基礎を養うに必要となる手段、すなわち学習内容である」ととらえている。この自立を生活科の立場からもう少し具体的にすると、まず集団や社会の一員として集団生活ができることであり、言い換えれば社会性を身に付けることである。次に狭義の自立としての意味自分のことは自分ですることがある。さらに、意見をはっきり述べたり、人の話をしっかり聞くことというコミュニケーション力も挙げられよう。最後に、身近な社会や自然等の環境に積極的に働きかけるという自主性も必要不可欠である。これらのことは、まとめるならば社会性を身に付けるということに他ならない。子どもの実態や思いをみとりながら、上記4点を念頭において学習を進めていきたいと考えている。今回の「たべもの見聞録」の単元で考えると、具体的な様々な活動を通して、集団や社会の一員である自分ということに触れられればよいと考えている。また米という対象に主体的にかか

わりその中で学ぶ喜びを感じ取らせたいと考えている。そのためには、子ども一人ひとりの思いやこだわりを丹念にみとり、それをうまく支援したり、整理したりしていくことが必要になってくる。

### ③表現力を育て一人ひとりを学習の主人公に

少人数の複式学級の学習集団が、意味と内容を広げたり、まなざしを共鳴する授業を展開するためには、子ども一人ひとりが表現力を身につけ力いっぱい活動できることが必要である。そのために、朝の会でのお話とお尋ねの活動を大切にしている。例えばみんなの前で「家で猫を飼っています。」とお話する。するとそれについての質問が出る。『雄ですか雌ですか。』『どんな餌を食べますか。』『毛の色は何色ですか。』等である。その一つひとつに前に出た児童が答えていく。このようにして、前に出て話すことやみんなに話すことに慣れたり、相手に伝える話し方を身に付けてほしいと願っている。1年生の児童も2年生の話し方や質問の仕方をまねて、少しずつこの活動に入っていけるようになる。みんなの前で話すことに楽しみを見つけ、わくわくしながら自分の番を待っているような子どもを増やすことで、いろいろな教科の学習でも自然にお話のできるようになっていってほしいと考えている。次に文章を書くことによる表現力もつけていきたい。1年生も2学期になり、少しずつ絵日記や〇〇さんへのお手紙等、簡単な作文を書けるようになってきた。まだまだ個人差もあるが、いろいろな興味津々の体験活動をする毎に絵日記を書き、少しずつ自分の思いを表現できるようにしていきたい。また、文や絵に現れた一人ひとりの思いやこだわりを学習の中に生かし、認めてやることにより、主体的に活動できる子どもを育てていきたいと考える。

### ④複式学級の学び

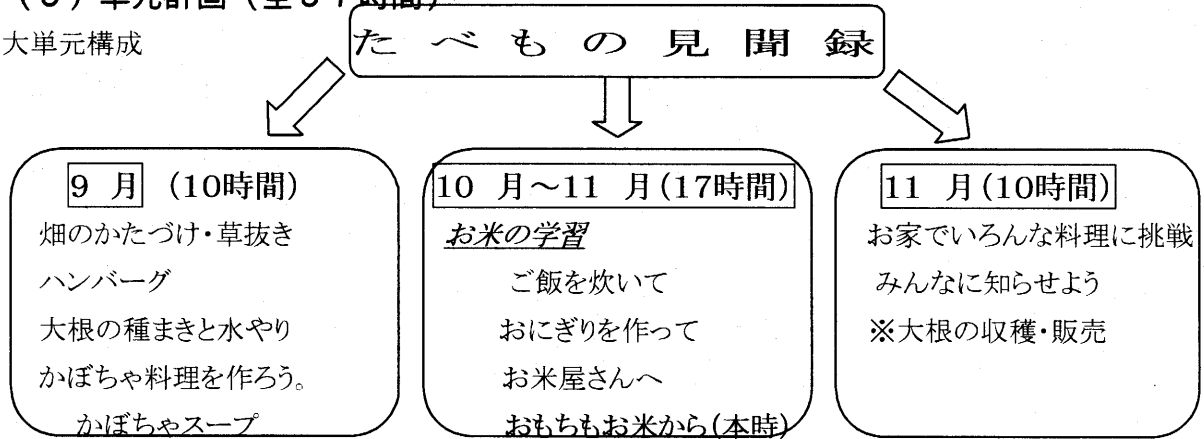
小学校においては、国語と算数の指導時間が多く、複式学級ではそのほとんどの時間が直接指導と間接指導を組み合わせた学年別指導の形態をとっている。この形態は児童が6年生になり、小学校を卒業するまで続くわけであるから、関節始動時に自分達で学習を進行する力は、1年生から少しずつ培わなくてはならないものである。本校では、生活科の時間は、異学年同単元指導の形態の授業をとっているが、そこでも複式学級であることを意識して学習を展開していくことは大切なことだと考えている。指導者が前面に出る形から、司会者をたてて進行を子どもに委ねたり、ともすれば指導者の独占物となつてしまう黒板を児童に解放し、子どもが板書するような学習を生活科においても取り入れていきたいと考えている。1年生は、2年生の発表から話し方や言葉の使い方を学び、下学年へと学習スタイルが継承されていくのであるから、上学年の役割は大きいものである。2学年が同じ教室で学ぶわけであるから、知らず知らずの間に効果があがっていると考えられるが、意図的にかかわりをより密にすることもできる。1年生と2年生のペアによる活動をさせたり、異学年混合のグループを活用して学習させたいと考えている。上学年が下学年の世話をすることで、自分自身も成長できるし、下学年も上学年をめあてに頑張ろう、伸びようと励むことができる。このかかわりの中で、複式としての学び方の内容が広がり、質の質の高いかかわりに一歩近づくことができる。また、1年生と2年生の発達段階の学年差は大きいものがある。そこで同単元指導の生活科においても、1年生・2年生それぞれの学年を意識して目標を設定していきたいと考えている。個人差はあるにしても、2年生には、1年半学習した経験をふまえてやや高い目標を設定する。

## (2) 単元目標

- ① 米を中心とする食に興味・関心をもち、食生活と自分とのかかわりをより主体的にすることができる。  
(1年生の中心目標)
- ② みんなで考えたり、活動したりすることに価値や喜びを見出し、周りの人や事象とのかかわりの中で、自分自身の学習や生活に自信やはりをもつことができる。  
(2年生の中心目標)
- ③ 思いや気づきを、話し言葉や書き言葉で素直に表現できる。  
(2学年の共通目標)
- ④ 周りの人とうまくコミュニケーションをとり、協力しながら学習できる。  
(複式の目標)

## (3) 単元計画 (全37時間)

大単元構成



小単元 お米の学習(全18時間)

### 第1次 お米について考えよう。

2時間

お米って・・・ 田んぼで作っている。水があるよ。案山子・稲刈り・草みたいな感じ。

お店で買うよ。袋に入っている。お水で電気釜で炊くんだよ。

お米をといでから炊くんだよ。お米の料理っていろいろあるね。 ご飯を炊いてたべよう。

### 第2次 おにぎりを作ってたべよう。

3時間



お米をうまくとげるかな？三角や丸いおにぎりを作れるかな？

サランラップを使うと簡単にできるよ。お米に水がしみ込むって不思議？

いろんな具を入れて、好きな味になるからうれしい。

ご飯を炊いたり、おにぎりを作ったり、みんながんばったからおいしく食べられたよ。

### 第3次 お米屋さんに行って、お米を見たりお話を聞いてこよう。

3時間

お米って、いろんな種類があるんだな。

いっぱいお米がある。すごいな。

精米ってやっているんだな、知らなかったよ。

日本中からお米が……。 もち米でお餅をつくるんだな。

### 第4次 お餅について食べてみよう。

9時間(本時 6/9)



保育園でもやったよ。やわらかくておいしいな。

つきたてって、とってもおいしい。

こんなおいしいお餅をみんなにも食べてもらおう。

お餅屋さんの作戦開始！！他のお店に負けなぞ。看板もいるよ。景品も作ろう。人気のお店に。

楽しかったな。お餅屋さん。

## 2. 単元の考察

### (1) 「意味と内容」をひろげた場面

今回の単元では、「体験」「人とのかかわり」「気づき・ふりかえり」をキーワードとして学習した。その中で「意味と内容」のひろがりについて具体的に捉えたい。単元設定の理由にも記述しているように、子ども達はいろいろな体験をした。調理やお餅屋さんの用意の活動ではグループ数名による子ども同士のかかわりが多くなる。その中で人とのかかわり方を学んだり、自分で考えて、自主的に活動するという自立が促された。複式学級という特性もあり、これは異学年のかかわりという形をとる。自然に2年生がリードし、1年生も協力して活動するという形になって現れる。次に「人とのかかわり」については、今回の学習において、いろいろな人との出会いがあった。その出会いを通して、人の思いや働きに触れ、自分中心にしか考えられない傾向の強いこの時期の子ども達も、少しずつ相手を意識することができるようになった。大人の人々の働く姿やお話からは、そのすごさや大変さもかいま見ることができた。また、お餅屋さんでは、お客さんとして来てくれた人達とのふれあいで、子ども達はやりがいや手応えを得ることができた。このようにいろいろな場面での人とのふれあいに触発され、意欲を喚起されたり、成就感をえることができたし、自分と比べることを通して相手を意識することができた。このように、「体験」や「人とのかかわり」を通して自己を見つめ、自分が集団の一員であるということを感じるようになったと捉えている。このことが、「自立への基礎を養う。」ことに繋がっていると考える。

### (2) まなざしが共鳴する場面

「気づき・ふりかえり」の面から、まなざしの共鳴について考察してみる。体験や活動の前後には、話し合いの時間を設定した。どんなお餅の店を開くかを相談した時に、子ども達はよもぎ餅の店に人気集中した。お餅屋さん（GT的場さん）がよもぎ餅が一番人気だと教えてくれたからである。しかし、もう少し話し合いを続ける中で、他のお餅のよさも出てきた。白餅は、餅本来の味を楽しめるとか、紫いも餅は珍しいから人気が出るとか、栄養士の神山さんがネットで調べてくれたみかん餅に挑戦したい、等の意見である。この話し合いの中で、それぞれのお餅のよさがクローズアップされ、子ども達は自分の選んだお餅の店に自信を持って参加できることになった。

もうすぐ、おもちやさんです。だから楽しみです。おもちやさんでは、4しゅるいのおもちを作ります。一つめは、白のふつうのおもちです。あじがきれいな人でもあじがないからたべられます。きなこやあんこをつけてもおいしいと思います。二つめは、よもぎもちです。よもぎは体によくあじもおいしいです。三つめは、オレンジもちです。ビタミンCが多いから体にもいいです。あじは、おいしいのかな？四つ目はむらさきもちです。むらさきいもを入れます。まとぼさんがこの前はじめて作ってくれたけど、おいしかったので作ることになりました。年をとりにくくなるえいようが入っています。けっこうおいしいし・・・。

2年生 男子

## 3. 成果と課題

体験や活動が多く、子ども達は楽しみながら学習できた。大単元として12月まで学習し、家庭生活との繋がりを持つことができ、3学期の学習に繋げることができた。反面活動や体験に追われ子ども達がじっくりと立ち止まって考える余裕が少なくなった。単元前半は特に学習を急いだので、子どもの思いをじっくりみとることができずに終わった。